

【論文】

カタコンベの異教神：古代末期の宗教観

宮坂 朋

問題提起

第1章 墓室E

第2章 墓室I

第3章 古代末期のイシス女神

結論

問題提起

通常の4世紀のキリスト教共同体カタコンベ壁画が手馴れた筆遣いではあるが節約をモットーとして描かれているように見えるのに比べ、ヴィア・ラティーナ・カタコンベ（以下VLCと略記）では細部にわたるまで豊かさが誇示されている。それは富裕の出資者による私的な領域の地下墓であることに由来する。凝灰岩の地層から巧みに掘りだされた多角形や連続する墓室プラン（図1.ヴィア・ラティーナ・カタコンベ平面図）、破風・ヴォールト天井・円柱は地上の贅沢な霊廟建築を模し（いわゆるnegative architectureとして知られるもの）、本物の大理石部材も時おり使用する。壁画に関しては、ポンペイ第1様式から第4様式まで発展した後終焉した、建築再現が復活し、あらゆる細部にモザイクの領域で鍛えられた豊富な装飾モチーフが描かれる。個々の人物像が画面いっぱい大きく描かれ、さらには公共浮彫に現れるような群衆表現がカタコンベに初めて登場している。また、個々の場面も単純な「救済の範示」図像を離れ、カタコンベ壁画では類例のない物語表現に富んだ新旧約聖書主題のほか、神話主題や擬人像が大々的に採用されている。ここに埋葬された人々は、自らがローマ文化の一員であることをまず強調し、また碑文で明言はしないが貴族的で公的なニュアンスを滲ませようとしているように見受けられる。

本論文では、まず墓室Eに描かれた女神像の見過ごされてきた細部の新解釈を手がかりに、壁画の図像生成の背景と古代末期の人々の心性を解き明かし、発注者に関して新解釈を提示するものである。

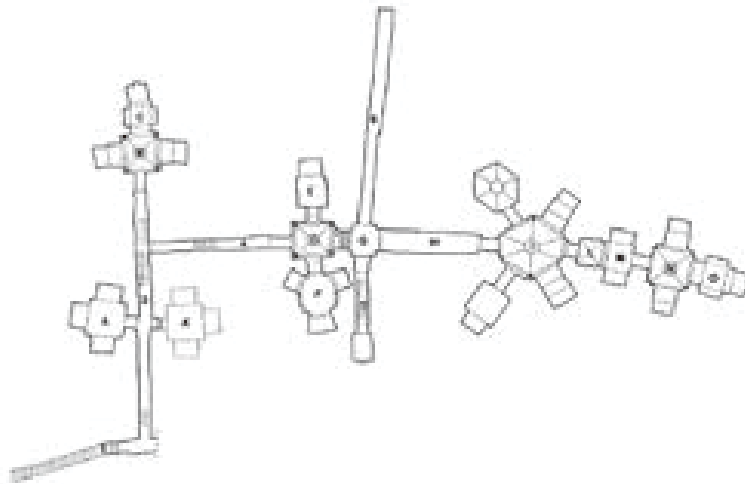


図1. ヴィア・ラティーナ・カタコンベ平面図



図2. 女神像、ヴィア・ラティーナ・カタコンベ、墓室E、アルコソリウム奥壁

第1章 墓室E

墓室Eの主役は古イタリアの大地の女神である、テッルス(図2)と解釈されてきた女神である¹。この女神は、矩形プランの墓室E(2.4×2.3m, 天井高3.32m)の奥壁に1基だけ掘られたアルコソリウムの半月形壁面の中心に描かれる。「テッルス」は、大地に横たわり、左肘を籠に載せて斜めに起こした上半身を支える。そもそもカタコンベ壁画で非常に珍しい女性の半身ヌード(しかも正面向き)は目を引くが、淡い灰色の半円形の岩の連なりの遠景による構図線がさらに全身を際立た

せる。1匹の蛇が地面から籠を這い上り、女神の左手首に二重に巻きついて、頭部を女神の胸の前でもたげている。女神は腕輪、首飾り、耳飾りのほか、まとめた髪にリボン (*tainia*) をターバンのように巻いて装飾豊かに美しさを誇示する。女神は通例のカタコンベ壁画の登場人物よりはかなり大きく、また両脚は交差させて右足は壁画の枠を超えて前に出ているように描かれる。女神は何か特別な力を発揮するかのよう右手を広げて胸の高さに挙げている。大地にじかに横たわる女神の周辺には、黄褐色の穀物と緑の葉をつけた赤いバラが描かれて、豊かな大地の実りを表現する。また今まで言及されてこなかったが、女神の下半身と左腕を覆う赤い布 (パラ) には、濃い赤茶のフリンジが付いている。



図3. 大地の女神達 (左) テオドシウス帝ミソリウム (反転・部分) (右) パラビアゴのパテラ (部分)

確かに半裸で大地に横たわる姿は、同時代のテオドシウス帝ミソリウムやパラビアゴのパテラ (図3) などの下方に登場する大地の女神と似ているものの、VLC墓室 E ではプットーが不在で母性は強調されていない。またテッルスとは別の要素が認められる。すなわち、画面向かって右端の麦とバラの花の背後には、これまで解釈されてこなかった十字形の物体が描かれる。これは女神の肩と同じくらいの高さの垂直に立つ灰色のスティック状のもので、上部に黄褐色の丸い部品、そのやや下に短い水平の横木が取り付けられている。発見者フェルーアはヘルマ柱²、グワルドウッチは石碑³とするが、そのようなものが描きこまれた理由を説明していない。筆者の考えでは、これは古代の船の「舵」である。舵は、船の進路を決める道具であり、運命の女神フォルトゥーナの持物でもある。墓室Eの女神は、通例のフォルトゥーナのように舵と豊穡の角を携えるのではなく、舵は離れたところに曖昧に置かれ、豊穡の角はない。また墓室Eの女神の上半身裸で下半身を覆う衣の濃い赤茶のフリンジ、頭部のターバン、周囲に生えるバラと麦、横たわるポーズという特徴はフォルトゥーナにしては特殊である。



図4. イシス女神

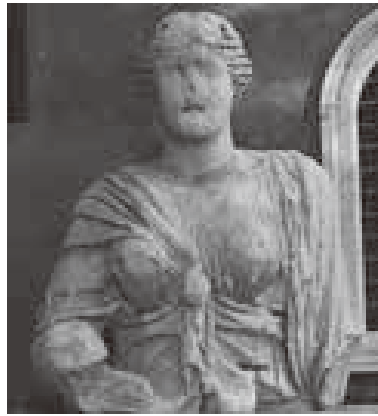


図5. イシス女神巨像



図6. イシス・フォルトゥーナ浮彫

まず、イシス女神⁴は、ポンペイ出土で現在ナポリ国立考古学博物館蔵のイシス立像の壁画（後62-79年）に現れるように下半身を覆う赤茶の羊毛のフリンジのついた衣装（図4）をまとい、多くの場合衣は胸の前で結び目を作っている。カンプス・マルティウスのイシス神殿に属していた多くの像の一体と考えられている、サン・マルコ前に置かれたイシス巨像（通称ルクレツィア）にもこのフリンジと結び目が表現される（図5）⁵。イシスは、再生をもたらすナイル川の氾濫の神として、また航海の神として、さらに知性の神として、またフォルトゥーナと習合して、舵を持つイシス・フォルトゥーナとして（図6. イシス・フォルトゥーナ像台座浮彫、おそらく第3行政区イシス神殿、ウェスパシアヌス帝あるいはドミティアヌス帝時代、カピトリノ美術館蔵）、共和政期のイタリア半島で広く知られていた⁶。

VLC墓室Eのバラの花と上半身裸で表現された女神の組合せは、ウェヌス（アフロディーテ）を想起させる。共通の特徴を持つ像が、現在カピトリノ美術館収蔵の帝政初期の《エスキリーノのヴィーナス》（図7）である。この作品は全裸の立像だが、リボンでまとめた髪型、バラの花（水瓶の下の箱にはバラが詰め込まれる）、水瓶に巻きつく蛇（ウラエウス）といった特徴が墓室Eの女神と共通する。この像は、イシスのサンダルを履き、イシス教入信式のため全裸で表現される、イシス・アフロディーテの像である。ホイバーによると、《エスキリーノのヴィーナス》は、ヘレニズム期のエジプトで習合したイシス・アフロディーテで、ローマのオッピウス丘のイシス神殿に奉納された像である⁷。このように墓室Eの女神は、イシス・アフロディーテ像の特徴をも示すといえる。



図7. エスキリーノの
ヴィーナス



図8. デア・シリア祭壇台座浮彫及び細部（神域内糸杉）

《エスキリーノのヴィーナス》が立像であるのに対し、墓室 E の女神は、大地に横たわるポーズをとる。これは大地・海・川・泉・都市・場所などの神性に一般的に用いられるポーズである。特に大地の女神のポーズであり、テッルスとして表現されたデア・シリア（アタルガティス）である可能性もある。デア・シリアは、シリアの水と豊穡の女神で、天の神ハダドの妻⁸だが、奴隷の守護神としてローマに導入された。奴隷は言うまでもなく地中海交易の重要な商品であった。シリア人奴隷は、前69年まで重要な奴隷の市場であったデロス島の奴隷市場を経由してローマに運ばれた⁹。コアレッリによると、カピトリーノの奴隷市場の売出しはカピトリーノのイシス神殿祭司が担った¹⁰。このようにデロス島経由で奴隷とともにイシスとデア・シリアの両方がローマにもたらされたのである。アフロディーテ、アスタルテ、デア・シリアにとって鳩は共通に神聖であり、それぞれの聖域で飼われ、それぞれの女神のアトリビュートとなり、女神自身も相互に同一視された¹¹。《デア・シリア祭壇浮彫》(図8) (1世紀制作、3世紀に修復、カピトリーノ美術館) の女神がウェヌスの特徴を示し、また背景のテメノス内にシリアの聖樹である糸杉が表されるのは、ローマでウェヌス＝デア・シリアとして習合したものの反映であると考えられる¹²。

墓室E奥壁左右の赤い斑入り大理石を模した円柱、左右壁上部の三連アーチ、天井はヴォールトといわゆる「負の建築」(ネガティブ・アーキテクチャ) は豪華である。三連アーチの下部には変化をつけたウェヌスにゆかりの貝殻(傘)モチーフが描かれ、その下にはそれぞれ羽衣をまとった6人の若い女性(ニンフ)が飛翔している。このニンフは、安全な航海を保証するそよ風の擬人

像であり、またカンプス・マルティウスのアンノーナの設備であるニンフ神殿と関わる存在である。彼女らの左右には縦長のパネルに多様な連続花文が充填されるが、バラの花は言うまでもなく、ウェヌスとの関連から選択されている。入口上部には大きな貝殻モチーフが描かれ、左右壁には枝に舞い降りる鳥が1羽ずつ描かれる。天井には墓の護符として中央メダイヨンにゴルゴネイオンが置かれ、周りにテュルスと犠牲獣（羊と山羊）、唐草装飾のある器が置かれる。円柱で支えられた奥壁と天井の境のアーチの花網の中央にウェヌスのピクシス（化粧瓶）が置かれ、さらにそのアーチ下にはディオニュソスとの関連を示唆する演劇の仮面が、またアルコソリウム上部には灰の中から復活するフェニックスと同一視された巨大な孔雀が二羽描かれる¹³。このように、天井を含む全ての壁面が、異教神像（航海の守護神を含む）の図像で満たされ、細部の装飾にも様々な神話の神々に関する持物が注意深く配置されている。

第2章 墓室I



図9. 墓室Ib入口、《神々の顕現》



図10. 墓室Ia入口

VLCの墓室Iにもデア・シリアに関わると考えられる画像がある。すなわち、副次的墓室aおよびbへの入口通路の上の半円形壁面には、二羽の鳩に挟まれ、向って左にデア・シリアを表す器に入った糸杉（つる草が螺旋状に巻いている）、向かって右にイシス・フォルトゥーナの持物の舵が描かれる（図9・図10）。周辺にはバラ（アフロディーテ）と麦（デメテル）が間を埋めるように描かれ、デア・シリア、イシス・フォルトゥーナ、アフロディーテ、デメテルと何重にも習合した女神の顕現がここでも繰り返し描かれていることになる。



図11. 墓室I天井



図12. キリストと二使徒

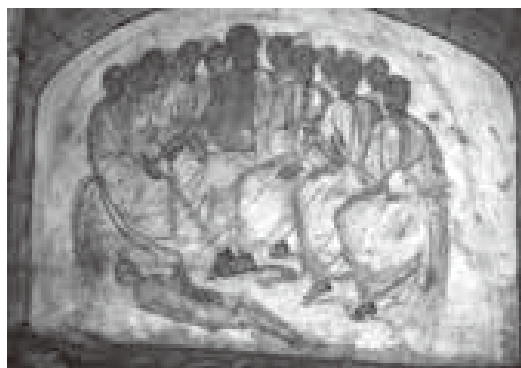


図13. 医学の授業

この六角形プランの墓室Iの六辺は、中心軸に通路、左右に三連アルコソリウム二基と副次的墓室a・bへの通路で占められる。壁画の主題は、六角形の天井には哲学者図像（図11）、三連アルコソリウムの奥壁に、《キリストと二使徒》（左、e）（図12）といわゆる《医学の授業》（右、h）（図13）が選択され、副次的墓室への通路の左右の壁面にも哲学者（aに若者2名、bに老人2名）が描かれる。《医学の授業》とされる壁画は、ヘレニズムの「七賢人」の図像から発展したもので、古代末期に中心人物を別格化することにより成立したキリストと十二使徒の図像のヴァリエーションを群衆表現で増幅させたものであり、哲学者図像の範疇である。つまりこの墓室Iの壁画図像は、哲学者のテーマでまとめられていると言える。すなわち、2つのアルコソリウム奥壁の主題は、一つは真の哲学者としてのキリストの顕現、もう一つは死と再生に関する哲学論議を行うキリスト教以前の古い哲学あるいは宗教の場面が表現される。このような神々の表現は先ほどのデア・シリア＝イシス・フォルトゥーナ＝アフロディーテ＝デメテルといった足し算式の神々の表現と近いものであるといえる。

また先述の様に、六角形プランがことさら選択されたことにも意味があると考えられる。六角形構図は、太陽を中心に据え、ほかの6つの惑星を周辺に配置した、モザイクや神殿に採用された。たとえば、シリアのパルミユラのベル神殿祭室天井や、レバノンのバールベックのユピテル・ヘリオポリタヌス神殿において、宇宙論的なユピテルを中心として、七惑星が六角形の中に表現されている。六角形は太陽神としてのベル神崇拜との深い関わりが指摘されている¹⁴。墓室Iの作られた古代末期には、太陽神を中心とする一神教へ多くの神々が習合していったことと、この墓室の六角形プランや神々の習合とは関わりがある可能性が考えられる。古代末期に異教神学が新プラトン主義や神秘主義を取り込んで、最高神の考えを取り入れ、クライマックスを迎えた。背教者ユリアヌス帝は、イアンブリコスに多くを負う、異教神学者であり、死後の生と、個人と社会生活において

期待する恩恵の両方を保障するものへ、公的宗教を再編することを提案した¹⁵。「一つの」、あるいは「良い」、神は、ヘリオスとして顕れ、その神から重要でない神々が創造されたというのが、ユリアヌス帝の唯一神異教神学の中心にあると考えられる。

古代末期の異教神学における太陽神の重要性は、マクロビウスにも表れる¹⁶。マクロビウスは、ギリシアとローマの全ての神々の神話は、一つの最高神である太陽のアトリビュートであるとする。すなわち、太陽神は、アポロ、メルクリウス、ヘルメス、ヤヌス、リーベル・パーテル、バッカス、ディオニュソス、ゼウス、イアオー、ハデス、アエスクラピウス、ヘラクレス、セラピス（セラピスと対になるイシスは太陽のもとに横たわる大地）、アッティス、オシリス、ホルス、パン、ハダドなどである¹⁷。新プラトン主義の影響を受けたこのような考えが、イシスやヘラクレスの姿に様々な神々の姿を重ね合わせる壁画の読み取りを可能にし、また墓室I天井中央メダイヨンの哲学者像の至高の太陽神の表現を可能にしたと考えられる。

一方、ほかに六角形の建築物として重要なものは、ハドリアヌス帝によるオステティア港である。この六角形の港は現在も残る。六角形の平面図が明確に示されたコインおよび縁付コインあるいはメダル（コントロールニアティ）が、ハドリアヌス帝時代及び古代末期に鑄造されている。この墓室の発注者はおそらく港を重要な仕事場とする交易従事者であって、特徴的な六角形プランのオステティア港に非常に重要性を認めていたと考えられる。

カタコンベにおいて六角形プランの墓室は数少ないものの、やや歪んだ形のものも含めると、VLCのほかに11か所が数えられる。ヴィビア1、カリスト3、マルコ・エ・マルチェリアーノ1、ドミティッラ6（墓室番号39, 40, 48, 68, 69, 74）である。多くが集中するドミティッラの六角形墓室は、すべて壁画で装飾され、豪華なつくりが特徴となっている。このうち、墓室74（フォルナイの墓室）は、特に、穀物升モディウスやパン及びパン籠を持つ人物、船から穀物の入った袋を運搬する人々、疑似大理石などを描いて、VLCの図像と比較すべき作例となっている。「パン焼き職人の墓室」というより、アンノーナに従事した船主あるいは船主組合（*corpus navicularii*）の墓室と考えるべきであろう¹⁸。このように考えたときに、六角形の墓室プランは、穀物をエジプト（あるいはアフリカやシチリア）から輸入していたアンノーナにかかわる船主と考えることは、無理なこととは言えないだろう。

ローマ人は利益を与えてくれる神に祈願・奉納・供儀を行い、利益を与えない神を忘れて行った。従ってローマの宗教は体系を構成することはなかったのである。墓室Iにおいても、おそらく地中海交易に従事した発注者にとって、有益な神々を次々と列挙して行き、またそれぞれの神々が習合していった結果、このような画像が出来上がったと言える。また、そのような神々の中にキリスト教の神が含まれていても不思議はなかったといえる。

第3章 古代末期のイシス女神

「異教」は禁止され、キリスト教が国教化された4世紀後半から5世紀初めにおいて、イシス（デア・シリア、フォルトゥーナ、アフロディーテ、テッルスと習合）が描かれ得たのはどのような理由だろうか。

VLCにおける（あるいは古代末期全体の）異教神の表象に関する議論には、キリスト教的解釈¹⁹、宗教的内容が伴わない世俗的なアートとしての異教的イメージ²⁰、古代末期におけるヘレニズム文化の浸透の結果²¹と貴族の教養としての神話の尊重²²、古い宗教に対する様々なレベルのシンパシー、あるいは、異なる宗教間における共有（信仰、死後の復活と言った考え、芸術、身振り、様式、図像）²³、多神教的宗教慣例の温存²⁴と様々な考えが提示されてきた。

異教神への祭祀が行われた神殿の運命は、異教禁止令発布当時どのようなものだったのか。キリスト教文学で人気のあるテーマとして取り上げられているように、神殿破壊や、アレクサンドリアのヒュパティアのような異教徒に対する非寛容の仕打ちが何のためらいもなく行われていたのか。ビールマンは、アンミアヌス・マルケリーヌス（*Amm. Marc. XVI, 5-21*）やクラウディアヌス（*De sexto Consulati Honorii Augustii, 41-55*）のテキスト中でローマの異教神殿建築が賞賛され、354年の暦は異教神祭日を列記していることを述べる²⁵。4～5世紀当時、非キリスト教祭祀が継続して活発に行われており、ローマ知事 *Praefectus urbi* による神殿維持活動や改修についての碑文も多い²⁶。神殿は、皇帝財産とみなされ公費で保存修復がされるべきものであり、また、神殿の美術的歴史的価値のゆえにも保存されるべきものと一般的に理解されていた²⁷。

ローマでは、度重なるテヴェレ川氾濫、408年の地震、410年のアラリックの侵入など、4世紀末から5世紀初めに災害が頻発する²⁸。丈夫なローマン・コンクリート工法の公共建築物も次第に損壊して行き、公費で修復がされることも少なくなり、徐々に私的占有されていく過程を示すこととなった²⁹。まず川に近くもともと湿地だったカンプス・マルティウスが初めに打撃を受けたが、機能を完全に失うほど決定的ではなく、ポンペイユス劇場とマルケッルス劇場の修復の記録がある³⁰。ペンサベネによると、435年になって初めてテオドシウス2世の法令で全ての異教祭祀を禁止し、異教神殿を破壊して教会に変えることが奨励された³¹。

ローマ以外でも、異教神殿はすぐ破壊されたわけではない。テオドシウス帝は、エデッサの異教の神像を芸術品として保護するように命令した³²。また12世紀のアンティオキア総主教の記事に従うと、4世紀の都市アレクサンドリアには、全体で2478神殿（住宅は24296軒）があったとされる³³。このように考えると、VLC壁画の描かれた時代には、異教神殿はまだ公共財産であったため、都市内に憚らず存在し、公に修復もされた。

公的な法的根拠を持つ神殿の場合は以上のようなようであった。私的な領域で異教神像を祀ることに、なおさら何の規制もなかったであろう。1937年、ローマのラティーナ門付近のヴィッラ・グランデのアラディウス家（*Aradius*）のドムス住宅のララリウムから、18体の異教神像が出土した³⁴。アントニヌス朝に建てられてコンスタンティヌス朝に改修された住宅である。神像は、現在ローマ

国立考古学博物館テルメ館に収蔵のイシス像(図14)、ディオニュソス-オシリス像、デメテル-イシス像、ヘラクレス-ハルポクラテス像が、一緒に出土している³⁵。

このアラディウス家はセプティミウス・セウェールス帝時代から5世代にわたって元老院で活躍した名家で、家の主人アラディウス・ルフィヌス(*Aradius Rufinus*)は、ローマ知事*Praefectus Urbi*としてアンノーナに携わっていたので、376年にローマの港ポルトゥスのイセウム(イシス神殿)を改修していることがわかっている³⁶。イシス神殿は、倉庫に保管された穀物を守護する重要な施設であったからである。彼がキリスト教に改宗したのは、ユリアヌス帝の死(363年6月)と376年の間で、飢饉のときにローマから外国人を追い出さなかった功績により、アンブロシウスからも賞賛されている³⁷。



図14. イシス像



図15. 墓室M、くじ引き



図16. 縁付コイン、くじ引き

彼がイシス神殿を改修したのは、自身のキリスト教改宗後であり、このように異教禁止令の後にも、私的な領域でも公的な領域でも異教神は祀られたことの貴重な例である。またイシス女神が、港やアンノーナと深く関わる神であることがわかる。神の加護を乞うための祈願、供犠、供物は、ローマ人にはないがしろにすることの出来ない義務と考えられたようだ。また、アンノーナを管理するローマ知事に対し、運送業者からイシス神殿修復の強い要請もあったに違いない。

イシスや異教神の登場する古代末期のもう一つの重要な要素として、アルフェルディによってカタログ化された*Uota Publica* コインである、いわゆる「コントロールニアティ」(縁付コイン)がある³⁸。ディオクレティアヌス帝からヴァレンティアヌス3世時代まで鑄造され、多くの場合真鍮製で、た

まにブロンズが使用されたものである。機能は明確ではないが、新年の祝日に、皇帝に忠誠を誓い彼と帝国の健康を願うものに配られた引出物らしい³⁹。表面に皇帝の肖像、裏面にエジプトの象徴（イシス、セラピス、ホルス、アヌビス、ナイルの擬人像、スフィンクスなど）が刻まれたもの、ブロンズ製のコインには、馬車競技、神話場面、異教神（セラピスも）、アレクサンダー大王、ネロ、有名なギリシア・ローマの著述家や思索家が表現されていた。異教徒キリスト教徒を問わず、エジプトのパンはローマ人にとって必要であって、エジプトはローマの「パン籠」として重要であった。新年のお祝いに豊かな食糧供給を祈る縁起物のコインを配ったと考えられる。エンソリは、「飢餓と先祖の宗教の軽視」を関係づけた異教徒の貴族シンマクスのテキストを引用している⁴⁰。深刻な問題であった都市ローマの食糧供給祈願とエジプトの神は深く関わっていた。

VLC 壁画の中にも、このコインに刻まれた画像を手本にしている作品も目に付く。墓室 M の《くじを引く兵士》(図15)の場面は、コントロールニアティの裏面に良く表現される戦車競技でのくじ引きの場面(図16)をモデルとしている⁴¹。

4世紀に活動中であったイシス神殿、エスクイリーヌス、クイリナリス、カラカラ浴場、キャンパス・マルティウスの4カ所のみであった⁴²。中でも、キャンパス・マルティウスのイセウムは、アンノーナなど公的な穀物を扱う、公的な性格の神殿であった。国家の資金の出資があったため、より大規模な施設であった。また、先述の通り、活動期は他の3つより長く、5世紀まで生きながらえた。イシス信仰が、紀元後1世紀の半ばに、貴族の私的な礼拝から、大衆の公的な宗教へと変化したのは皇帝の後押しによる政治的なもので、特にドミティウス帝、ハドリアヌス帝、セウエールス朝の皇帝らが、穀物、紫斑岩、その他の商品の輸入の点から、経済政治的重要性を認め、エジプトの神々を最優先したことによる。特にセウエールス朝から4世紀まで、食糧供給行政サービスであるアンノーナとの関係からイシス信仰は盛んになる。

キャンパス・マルティウスにある、アンノーナ船団によって運ばれてきた商品の倉庫（穀物、パピルス、ガラス、麻、ストッパなど）⁴³の守護神としてイシス・セラピス神殿が建てられた。ここから大量のエジプト製の、あるいはエジプト風の建築部材の破片が出土している⁴⁴。その神殿で使用する聖水の貯水槽として三角形のデルタという名前の建築物が建てられていたことが、フォルマ・ウルビス（セウエールス時代の大理石の地図の35番からの再構成）からわかる。またポルティクス・ミヌキアでは、おそらく穀物配給が行われ、中に建てられたニンフ神殿は、公共穀物に関する記録館として機能していた⁴⁵。このイシスの聖域の略奪は7-8世紀で、聖域の上に聖堂（S.Maria Sopra Minerva と S.Stefano di Cacco）が建つのは8-9世紀である⁴⁶。このようにキャンパス・マルティウスのイシス神殿が長く命脈を保ったのは、食糧供給に関する切実な祈願と関わっていたからであろう。

アンノーナの守護神というイシスの側面から、VLC 墓室Nに表されたヘラクレス主題も説明できる。すなわち、隣の墓室Oにはデメテル-ケレス、カルタゴ擬人像など穀物関係の図像が表現される⁴⁷。墓室N天井の麦綱とケシ、麦刈りのプットーは、デメテル-ケレス-イシス神の持物を表

す。アルコソリウムに描かれたヘラクレスは、ヘラクレスーセラピスとして、ケルベロスをつれた冥界の神と再生の神であるとともに、ケレスとともに12月21日に一緒に祝われる⁴⁸。イシスとセラピスは対の神であることから、墓室NおよびOにヘラクレスとケレス（デメテル）が隣り合って描かれたと解釈できる。またヘラクレスは、カクスと戦い、アテナとともにローマの川港の牛広場の守護神として、地中海交易の商人たちを守る存在であった。

以上の点から、イシスやヘラクレスなど穀物と航海と死後世界を支配する神々を墓の主題として選んだ VLC 壁画の発注者は、アンノーナに関わる職業に従事していたに違いない。オステリア・アンティーカに残る運送業者の58の組合事務所が残る。床モザイクには、様々な職業のシンボルが碑文とともにモザイクで表現される。アフリカ船団、カルタゴ船団、川筏船、ストッパなどの取引先、取扱商品、船の種類など様々な組合の床モザイクを見ると、それぞれの特定の職業にふさわしい特定のモチーフが選択されているのがみてとれる⁴⁹。VLC壁画において、モディウス（穀類の測り杓）やアンフォラが墓Oに描かれているので、発注者は確実に穀物や油、ワインなどを運んだ業者なのだろう。一方、船や積み荷の運搬などに関する具体的な描写はないので、船長などのように具体的に船に乗組んだり、特定の海運業に携わったというより、大規模な投資家として、あるいは官僚として関わった者であることが想像される。

ナウイクラリイ (*Navicularii*) は、単なる船員ではなく、1艘の船に自ら乗り組む船主から、数多くの船を持ち部下に航海を任せて自らは乗り組まない大規模な実業家、船を持たないが莫大な資本を海上交易につき込む大資本家まで様々なレベルがある。彼らは免税措置という特権が受けられた⁵⁰。ローマのカタコンベに埋葬されたナウイクラリイの船の行先も、おそらくシチリアや北アフリカ、シリアなどであったことが想像できる。なぜなら、アレクサンドリア船団によってエジプトの穀物は、遷都後コンスタンティノポリスに運ばれたはずだからである⁵¹。

ナウイクラリイの守護神は、イシスとオシリスの夫婦神、ウェヌス、ヘラクレスとポセイドン、ネプトゥヌス、ディオスクーロイなど様々あったが、特にイシスは少なくとも帝政初期には、エジプトから来る穀物船団の守護女神として抜群の人気を誇ったのであった。



図17. レオの墓室墓碑、コモディッラのカタコンベ、
(*Leo officialis ann(onae) si[bi] vivo fecit cubuculum in [A]dau(c)ti et Feli[c]jis.*)

従ってVLC墓室E壁画にイシス像を発注した者は、地中海交易に深くかかわる職業のもの、特に*Corpus navicularii* (船主組合)のメンバーであると考えられる。この船主組合は、ナウイクラリイの職業的組合で、初めは国家と対抗する時にメンバーの利益を守るため機能したが、代表者(*Patronus*)を皇帝の近くの間人やローマ知事(*Praefectus Urbi*)や食糧長官(*Praefectus Annonae*)などから選出した。レオはアンノーナの長官ではなく、一官僚に過ぎなかったが、コモディッラのカタコンベに墓碑銘付きの豪華な墓室を残し(図17)、周辺の地下墓を開発する財力を持っていた。モニュメンタルな壁画で装飾された私的なカタコンベの墓室は、このようなアンノーナ関係者による出資が想定できる。

結 論

イシス教は生命をもたらすナイルの氾濫の開始に星(シリウス)が及ぼす深い思惟に関係した、また、水の持つ再生の力に関係した礼拝で、プトレマイオス朝の政治宗教的なプロパガンダとも深く関わって発展した。また、航海、母性、託宣、治癒の神で、かつ知恵の神でもあり、ヘレニズムの哲学の影響を受けて再生したため、多数の神を認めながらも唯一神信仰と超越神の特徴をも示す⁵²。イシスの預言と医療の信仰に関する言及は、エジプトの殉教伝で延べられる。アレクサンドリアの司教キュリロスは、夢で神のお告げを受け、イシス神殿へ赴き、託宣を壊し、健康を祈りに来た信者たちのいた神殿を壊し、その場所に二人の聖人キュロスとヨハネの遺物を埋葬して、アレクサンドリアに船で行き来する人々のための心の支えとなる教会を建立した⁵³。

バグノールによると、エジプト内部ではイシス教をはじめとする異教は3世紀半ばに経済的理由もあり、全般的に不振となる⁵⁴。しかしそれは4世紀に信仰が途絶えたということではなく、ナイル川の祝祭日は、公的に非神格化された祝賀行事として424年まで祝われ、その後も明らかに長く続いた⁵⁵。人々(特に富裕の貴族)が何の問題もなくイシス教や他の異教を私的にも社会的にも許容し、さらに多神教が新プラトン主義のお蔭で、より哲学的にまた道徳的に整備されつつあることに業を煮やした教会は、イシスの宗教を根こそぎにする必要を強く感じたはずである。モザイクなどで大隆盛を遂げたナイル川モチーフには、命の水の恵みをイシスに帰する幅広い層に浸透したゆるぎない気持ちが現れていたからである。サンドの考えでは、この時キリスト教会は伝統的にイシスと結びつけられているナイル川を、イシスからもぎ取りマリアへ、また魅力的な託宣をキリスト教化してマギヤシビッラへ、ひき渡そうとした⁵⁶。また、それまでナイル川が担っていた伝統的な再生と新生を、アプシスの聖母子で表現しようとした。サンタ・マリア・マジョーレ聖堂のモザイク装飾の図像に、女預言者が強調され、エジプトに関わる図像が多く採用されているのは、イシス女神に対抗する意図からであるとサンドは解釈している。またサンドの考えでは、知恵の女神イシスに勝る知恵の概念(アフロディシアスのギリシア哲学、マギの東方の知恵、ユダヤの預言者の知恵、シビルによるローマの知恵)がモザイクに表現されている⁵⁷。無知なヘロデ王以外の全ての知恵はキリストに敬意を払う。サンタ・マリア・マジョーレ聖堂内でエジプト図像がことさら多

く凱旋門型アーチ、アプシス、身廊のモザイクで採用されているのは、やはりイシスを意識しているからであろう。さらに、葬祭美術から地上のバシリカ装飾に場を移すにあたって、ローマ戦勝記念浮彫の集団戦闘場面を用い、貴族的な内容も十分盛り込んで、キリスト教美術の公的な領域への格上げを初めて可能にした。このようにして、「エジプト図像」はカタコンベの私的な美術からバシリカ装飾の公的な美術の橋渡しをしたのである。

ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画に描かれた異教神図像は、すでにキリスト教化した時代であっても、ローマ的な宗教観を保持したローマ人の心性を明確に示した例として位置づけられる。

-
- 1 発見者フェルーアは、当初《クレオパトラの死》と図像解釈したがグワルドッチの批判を受け入れ、修正した。Guarducci, M. "La <morte di Cleopatra> nella catacomba di Via Latina", *RPAA*, 37, 1964-65, 250ff. Scortecchi, D. "Ricerche sul tema cosiddetto della Tellus nell'ipogeo di via Dino Compagni a Roma", *Vetera Christianorum*, 35, 1998, 257-278.
 - 2 Ferrua, 61
 - 3 Guarducci, 266.
 - 4 *LIMC*, VI, 1990, Isis.
 - 5 サン・マルコ聖堂前巨像の、いわゆる「ルクレツィア」は、イシス神殿の *Isis Sothis* 像である (*Dione Cassio* 80, 10, 1)。
 - 6 *LIMC*, VI, Isis *Fortuna*, 1990, p. 784-.
 - 7 Haeuber, Christina. *The Eastern part of Mons oppius in Rome*, L'Erma, 2014.
 - 8 *LIMC*, III, 1, Dea syria, 1986, p.355.
 - 9 Haeuber, p.173.
 - 10 Coarelli, F. "Iside Capitolina, Clodio e I Mercanti di Schiavi", Nicola Bonacasa e Antonio Di Vita (eds.), *Alessandria e il mondo ellenistico-romano, studi in onore di Achille Adriano*, L'Erma, 1984, 461-475. またイシス神殿祭司は、カピトリウムのコレギウムのメンバーでもあり、飢饉やアンノーナに関わる役目も担っていた。
 - 11 Haeuber, 173.
 - 12 Haeuber, 173.
 - 13 Picard, Charles. *Comptes-rendus, Acad. Inscr.*, 1956, p.278. ピカールによると、プトレマイオス朝のメンフィスのセラペイオンでバッカスの孔雀は神聖なものとされる。
 - 14 Brown, D. "The Hexagonal Court at Baalbek", *American Journal of Archaeology*, 43-2, 1939, p.287.
 - 15 Ruepke, Jorg. *A Companion to Roman Religion*, 2007, 389.
 - 16 Vaughan Davies, Percival. *Macrobius the Saturnalia translated with an introduction and notes*, Columbia University press, 1969.
 - 17 *Ibid.*
 - 18 Mazzei, B. "Il cubicolo dei "Fornai" nelle catacomb di Domitilla alla luce dei recenti restauri", *Acta XVI Congressus Internationalis Archaeologiae Christianae Romae*, (22-28. 9. 2013), *Constantino e I constantinidi l'innovazione constantiniana, le sue radice e I suoi sviluppi*, 2016, 1927-1942. マッツエイは、パン屋の墓室の発注者が船主関係である可能性を示唆するが、墓室の規模から、組合ではなく家族墓であ

ると考える。

- ¹⁹ Elsner, Jas. “Art and Architecture”, *The Cambridge Ancient History XIII, The Late Empire, A.D. 337-425*, 1998, 736-761. エルスナーによると、4世紀はアレゴリーの全盛期であり、異なる伝統をまとめ上げる力がある予型論を応用して、全ての異教図像はキリスト教的に解釈できると考える。マルセル・シモンによると、ヘラクレスはキリストの予型と考える。Simon, M. “Remarques sur la catacombe de la Via Latina”, *Mullus. Festschrift Theodor Klauser, Jahrbuch fuer Antike und Christenntum, Erg.1*, 1964, 327-335. Ferrari, Anna. “La relettura cristiani dei miti pagani”, *AnTard*, 209-222. 等このように考える研究者は多い。
- ²⁰ Becatti, Giovanni. “Opere d’arte greca nella Roma di Tiberio”, (*Archeologia Classica*, 25/26, 1973/74), 18-57, *Kosmos*, 1987, 463-514. Cameron, Alan. *The Last Pagans of Rome*, 2011, 691-742. 異教的イメージは、装飾的 (decorative) であって宗教的 (devotional) でないとする。
- ²¹ Eliav, Y.Z. & Friedland E.A. (eds.) *The Sculptural Enviroment of the Roman Near East, Reflections on Culture, Ideology, and Power*, Peters, 2008.
- ²² Esmonde Cleary, Simon. *The Roman West, AD200-500, An Archaeological Study*, Cambridge, 2013. Stirling, Lea M. *The Learned Collector, Mythological Statuettes and Classical Taste in Late Antique Gaul*, Univ. of Michigan press, Ann Arbour, 2005.
- ²³ Levine, L.I. (ed.), *The synagogue in Late Antiquity*, 1987. Narkiss, Bezael. *Pagan, Christian, and Jewish Elements in the Art of Ancient Synagogues*, 183-188.
- ²⁴ Toeroek, Laszlo. *Transfigurations of Hellenism, Aspects of Late Antique Art in Egypt AD250-700*, Brill, 2005. 子授けをマリアとイシスの両方に祈願する若いエジプト女性の例が引用される。
- ²⁵ Biemann, Chantal. “The fate of temples in Late-Antique Rome”, *The Theodosian Age (A.D.379-455) Power, Place Belief and Learning at the End of the Western Empire*, (Garcia-Gasco, R., Gonzalez Sanchez,S. & Hernandez de la Fuente, D. eds) 2013, 19-26.
- ²⁶ Biemann, 22.
- ²⁷ Biemann, P.24.
- ²⁸ Manacorda, D. “Trasformazioni dell’abitato nel Campo Marzio: l’area della Porticus Minucia”, *La storia economica nell’Alto medioevo all luce dei recenti scavi archeologici*, (atti del seminario Roma 2-3 aprile 1992), 1993, 31-51.
- ²⁹ *Cod. TheodXIV*, 14, & *Cod. Theod. XVI*, 10, 19.
- ³⁰ Manacorda, *Praefectus urbi Anicius Acilius Glabrio Faustus*が修復 (*CIL*, VI, 30355)。421~423 年にもこの人物がこの地域を修復したらしい。別のなくなった碑文 *fatali casu subversam* 408年の地震時の被害か？
- ³¹ Pensabene, P. *Roma su Roma. Reimpiego architettonico, recupero dell’antico e trasformazioni urbane tra il III e il XIII secolo* (Monumenti di antichità cristiana ser. II, vol. XXII), Citta del Vaticano, 2015, 791-2.
- ³² Haeuber, p.801, *Cod. Theod. XVI*, 10, 3
- ³³ Toeroek, 88. シリアの *Notitia Urbis Alexandrinae* は町の主要な5地区建物のリストを挙げている：
α 地区：308 神殿、1655 法廷、5058 軒の住宅、108 浴場、237 タベルナ、112 ポルティクス
β 地区：110 神殿、1002 法廷、5990 住宅、145 浴場、107 タベルナ γ 地区：855 神殿、955 法廷、2140 住宅、205 タベルナ、78 ポルティクス δ 地区：800 神殿、1120 法廷、5515 住宅、118 浴場、178 タベルナ、98 ポルティクス ε 地区：405 神殿、1420 法廷、5593 住宅、118 タベルナ、56 ポルティクス
- ³⁴ Candilio, Daniela. *L’Arredo scultoreo e decorative della Domus degli Aradii*, *Accademia nazionale dei Lincei Monumenti Antichi*, serie Miscelanea-vol.X 2005.

- 35 Candilio, 29.
- 36 Candilio, 31.
- 37 アンブロシウスにより *sanctissimus senex* と賞賛された (*De off. ministr.* III, 7, 45-51.)
- 38 Alfoeldi, A. *A festival of Isis in Rome under the Christian Emperors of the IVth Century, 1937.* Alfoeldi, A. & Alfoeldi, E. *Die Kontoriniat-Medallions*, 1990. Takacs, Sarolta. *Isis and Sarapis in the Roman World*, 1995.
- 39 Novello, Martha. “Echi di cultura Classica nei Contorniati a soggetto epico”, *Atenor*, 1, 1999, 99-120.
- 40 Ensoli, Serena. “Roma, ‘Babilonia d’Occidente’ di Agostino e i culti isiaci in età tardoantica”, *387 d.c. Ambrogio e Agostino le sorgenti dell’Europa*, 1995, 142-151. *relatio*, 3.16 : *sacrilegio annus exaruit. Necessae enim fuit perire omnibus, quod religionibus negabantur.*
- 41 Alfoeldi, A. & Alfoeldi, E. *Die Kontoriniat-Medallions*, Rs. Losmaschine 203 (Taf. 82, 3-8, Taf. 132. 11-12)
- 42 Ensoli, 1995, 144. 行政区カタログ (Notitia 334-357, curiosum 357-403)
- 43 Coarelli, 1996a, p.191.
- 44 Filippi, Fedora. *Campo Marzio, nuove ricerche seminario di studi*, Quasar, 2015, 69.
- 45 Coarelli, *Il Campo Marzio*, Quasar, 1997.
- 46 Ensoli, S. “I santuari di Iside e serapide a Roma e la resistenza pagana in età tardoantica”, *Aurea Roma*, 267-287.
- 47 宮坂 朋「ヴィア・ラティーナ・カタコンベのアフリカ的要素」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2015年, 189-194頁。
- 48 Macrobius, *Saturnalia*, 3, 11, 10: *Notum autem esse non diffitebere, quod a. d. duodecimum Kalendas Ianuarias Herculi et Cereri faciunt sue praegnate panibus mulso.*
- 49 Becatti, G. *Scavi di Ostia*, IV, mosaici e pavimenti marmorei, 1961, 64-85. (Reg. II, Is. VII.4. Foro delle corporazioni.)
- 50 De Salvo, Lietta. *Economia private e pubblici servizi nell’Impero Romano i corpora naviculariorum*, Samperi, 1992, 497.
- 51 De Salvo, L. “L’Egitto e l’annona di Roma”, (Bonacasa, N. Naro, M.C., Portale, E.C., Tullio, A. eds., *L’Egitto in Italia dall’Antichità al Medioevo. Atti del III Congresso Internazionale Italo-Egiziano, Roma, CNR-Pompei, 13-19 Novembre 1995*, Roma 1998, 95-102.
- 52 Gasparini, Valentino. “Isis and Osiris : Demonology vs. Henotheism?”, *Numen*, 58, 2011, 697-728.
- 53 *vita et conservation et Martyrium et partialis Narratio miraculorum sanctorum illustrium Anagyrorum Cyri et Joannis.* PG, 87, 3, coll. 3677-3699, spec. 24-29.
- 54 Bagnall, Roger S. *Egypt in Late Antiquity*, Princeton University Press, 1993, 268.
- 55 Bagnall, 270.
- 56 Sande, S. “Egyptian and Other elements in the Fifth-Century Mosaics of S. Maria Maggiore”, *Acta ad archaeologiam et artium historiam pertinentia*, XXI, 65-94.
- 57 Sande, 89.